

子どもの帰校後の生活の問題点

——とくに遊びと仕事を中心に——

Some Problems in Children's After-School Life

—Especially on their Play and Housework—

吉原 崇 恵

Takae YOSHIHARA

(昭和49年10月11日受理)

はじめに

子どもたちにとって、家庭科は主要教科からはみ出し、学習でない教科として差別視しながら、他面では人間的な欲求を満たしてくれる、実用的な知識、技能の習得を期待して教室にあらわれてくる⁽¹⁾と言われている。

教科教育学の研究対象として家庭科をおいた場合に、上のことはどのような教育的意味をもつものなのかを明確にする必要を感じるが、しかしながら、それを言及することが今回のテーマではない。

現在の子どもたちが家庭科に対してもつ期待は、実は子どもたちの生活の中から「手と体を動かして道具を使い、現実的に有用なものをつくる」という経験が、なくなってきていることを示しているのではないだろうか。その実態を把握することが今回の目的である。

そして、「手と体を動かして道具を使い、現実的に有用なものをつくる」ということは、究極的には「労働」を意味するものになるだろう。すなわち「労働」の意味を「人間が、肉体的・精神的能力を使用して外部の自然に目的意識的にはたらきかけ、自然を人間生活に役立つあたりに変化させる活動」⁽²⁾と定義した時においてである。(傍点筆者)

さらに、「労働活動においては、行動と認識は目的である生産物に即して実在性あるいは、客観性それ自体を要求する」⁽³⁾という点を認め、そこにおいて「労働」のもつ1つの教育力に注目しようと思う。(傍点筆者)

そしてその観点から子どもの生活実態をみて「労働」経験が少ないという実態を述べるのが今回の目的である。

以上のような問題意識に接近するために、子どもの生活の中で「ものをつくる」活動が多く存在する領域だと思われる遊びと仕事の領域を中心にとりあげた。その際、場としての学校を除いて、家庭、社会を含めた帰校後の生活という場を設定した。

調査方法

対象者の抽出

静岡市内の小学校5校を抽出し、5、6学年の各1クラスを無作為に抽出した。5つの小学校は、静岡市の小学区の中から居住者の職業階層がまとまっていると思われる学区を市の土地利用計画図を併用させて抽出した。

調査期間

昭和48年11月6～14日

回収方法

各クラスに直接出向いて、授業時間、休み時間をさいてもらい、教室で調査票を配布し、その場で書き入れさせ、即、回収した。

集計総数 392

(5年 192 (男子 197
6年 200 (女子 195である。

地域の概況

		住宅地域 横内小学校	新興住宅地域 西豊田小学校	商業地域 駒形小学校	山村地域 玉川小学校	工業地域 田町小学校	計
父 親 の 職 業	個人業主 農林漁業	4 (4.9)	3 (3.8)	1 (1.5)	48 (54.5)	1 (1.3)	57 (14.5)
	個人業主 商工業・その他	16 (19.5)	15 (18.8)	28 (42.4)	7 (8.0)	39 (51.4)	105 (26.8)
	会社・団体 役員	5 (6.1)	1 (1.2)	2 (3.0)	0	0	8 (2.0)
	常雇 専門的 事務的職員	38 (46.4)	41 (51.3)	16 (24.2)	7 (8.0)	7 (9.2)	109 (27.9)
	常雇 技能工 労務	11 (13.4)	16 (20.0)	11 (16.7)	21 (23.9)	21 (27.6)	80 (20.4)
	常雇 販売 サービス・その他	7 (8.5)	1 (1.2)	7 (10.7)	1 (1.1)	4 (5.3)	20 (5.1)
	臨時雇 日雇	0	0	0	0	0	0
	無職	0	0	0	0	1 (1.3)	1 (0.3)
	父 いない	1 (1.2)	2 (2.5)	1 (1.5)	1 (1.1)	1 (1.3)	6 (1.5)
	無答 不明	0	1 (1.2)	0	3 (3.4)	2 (2.6)	6 (1.5)
	計	82 (100.0)	80 (100.0)	66 (100.0)	88 (100.0)	76 (100.0)	392 (100.0)
概 観	閑静でよく 区画整理さ れている。 小さな公園 があるが野 球やボール 遊びは無理。 道路が狭い。	以前田んぼ だったところ に新しい 家が建ち並 びはじめた。 学校周辺は 交通量が多 く危険であ る。	県道をは ずれると昔か らの下町風 の商店街が ならび、そ の奥には密 集した住宅 が建てこん でいる。学 校付近は交 通量が多い。	市街からバ スで1時間。 統合により バス通学の 子どもが多 い。 面積の80% が山林で占 められている。	古くから家 内工業の盛 んな地で、 職人層の家 がたてこん でいる。 商店は飲食 関係が多い。		

結果

1. 遊び

子どもたちが平日よく遊んでいる遊びの種類は表1に示される。これによると、家の中での遊びが外での遊びより多くなっている。

表1 平日の遊びベスト5

家の外		家の中					
男 (197人中)	女 (195人中)	男 (197人中)	女 (195人中)	男 (197人中)	女 (195人中)		
自転車のり	97	バレーボール	81	ゲーム	117	トランプ	137
野球	92	自転車のり	76	トランプ	73	ゲーム	127
ソフトボール	46	なわとび	57	テレビ	63	テレビ	57
ドッチボール	39	バトミントン	57	しょうぎ	44	マンガ	53
サッカー	27	ドッチボール	42	マンガ	42	読書	49
計	301	計	313	計	339	計	423

家の中の遊びは、男女ともにゲーム、トランプなどの勝敗を伴う種類のものが多い。これらの遊びは共通のルールに対する公正な態度が要求され、知恵くらべの性格⁽⁴⁾、目的追求的な性格⁽⁵⁾をもっていることからして発達段階に相応している面をもっていると思われる。みたり聞いたり読んだりして静かに遊ぶ受容遊びも、小学校高学年から好まれる遊びだと言われている⁽³⁾、が、受容遊びで多い遊びはテレビやマンガという形になっている。

家の外での遊びは、ボールを使った運動的な遊びが多い。これは、多くの場合、ルールのある遊びであり、たんに運動機能の育成に役立つだけでなく、意志力、勇気、忍耐力、決断力を育て、集団の育成に寄与する可能性を含んでおり、発達段階に相応している。一方で集団の育成、ルールなどの点で、ボール遊びよりも単純だと思われる自転車のりが、男女ともに好まれている。遠くへ行ってみたいという経験の拡充に対する欲求をもち、機械に対する合理的態度が育成された段階での遊びだと思われる。

次に、子どもたちの間で流行している遊びを示しているのが表2である。この場合も運動的な遊びが大部分を占めている。受容的な遊びが、「はやっている」という形であらわれないことが特徴的で、これは1人遊びや少人数での遊びになるからだと思われる。

また、運動的な遊びの中でも、自然の中で全身をつかって遊ぶ山のぼりや木のぼり、ハイキングなどの遊びは少ない。

さらに、モノに働きかけ、モノをつくりかえる過程でモノの世界を知ることが出来て「労働」に相当する⁽⁶⁾遊びをかりに創作的遊びとすれば、この種の遊びはほとんどあらわれない。特に「手や道具を使ってつくる」というものは1件だけである。ビー玉、メンコ、お手玉、あやとりなどは、特に、手先や手指の機能を発達させ、さらに器用に使いこなすことによる遊びで、モノをつくる時の1つの基礎能力を育成すると考えられる。その意味で創作的遊びに準ずるものとしてみた場合も、全体的に行なわれている遊びではない。

表2 はやっているあそび

地域	新興住宅	住宅	工業	商業	農林業	計	%
あそび							
なし	38	8	7	21	17	91	16.3
わからない	4			1		5	0.9
不明		7		3	6	16	2.9
運動小計	42	71	109	47	57	326	58.2
ボール	15	65	94	22	44	240	42.9
遊具施設	1					1	0.2
自然	1	4	1	4		10	1.8
かけっこ	25	2	14	21	13	75	13.4
勝敗・ゲーム・トランプ	5	3		5	19	32	5.7
創作・構成・表現		ビー玉 メンコ 33	ぬう 1	あやとり お手玉 8		42	7.5
操作・科学玩具				4		4	0.7
受容的	1					1	0.2
収集		1				1	0.2
模倣ごっこ	2	2				4	0.7
他		13		1	24	38	6.8
計	92	138	117	90	123	560	100.0

また、はやっている遊びが「なし」と答えた者や「わからない」と答えた者が居ることは、遊びを通して仲間づき合いを学び、社会的ルール、個人の果たすべき役割、責任などを学ぶという遊びのもつ1つの教育力⁷⁾を得ることが出来ていないだろうことがうかがえる。

以上のような問題点を含んだ子どもたちの遊びを成立させている条件の実態をみる。

表3は、平日の遊び時間である。遊び時間が「なし」「30分ぐらい」「1時間ぐらい」というものを合わせると約45%である。なお、遊び時間が「なし」の者が約10%いることは、みのがすことができない。そして、この遊び時間「なし」の子どもたちを除いて、遊び時間をもっている子どもたちの約51.6%は現状に満足してはいない。表4をみると、「もう少し遊びたい」「もっと長く遊びたい」と思っている子どもたちが多くいることが示されている。

表3 遊び時間

計	なし	30分位	1時間	1.5時間	2時間	3時間	4時間	5時間以上	無答
392	40	42	91	79	83	24	14	10	9
100.0	10.3	10.7	23.2	20.2	21.2	6.1	3.6	2.6	2.3

表 4 遊び時間に対する満足感

計	今のくらい でよい	もう少し 遊びたい	もっと長く 遊びたい	遊び たくない	その他	無 答
343	141	135	42	2	3	20
100.0	40.8	39.4	12.2	0.6	0.9	5.8

あそび時間の間で「なし」と「無答」の者を除いて

遊び場所についてみると表5に示されるように、家の中、学校の運動場、公園となっている。昭和35年当時、出された「日本の子ども」⁽⁸⁾の中で、小川氏は「家の中について多いのが道路である」と書かれている。また「子どもの遊び空間」⁽⁹⁾の中で藤本氏は、「少年時代、私は農村や田舎町を転々と移り住んだが、どこに行っても、道路での遊びは盛んであった。おにごっこ、陣とり、リレーなどで道路を縦横無尽に走りまわったし、ヤカンの水で線を書いて、けんけん相撲や宝とりなどをよくやった。」「大人たちは、打ち水をした道路端に床几を出し……中略……まだ遊びたぬわんぱくどもが、暗がりを利用しておにごっこやかくれんぼをして走りまわっているという風景があった。」と書かれている。昭和35年頃からの高度経済成長政策、産業基盤育成の中での道路建設、自動車交通量の増大のあおりをうけてもはや、道路の遊び場としての位置は変わり、戸外での遊び場といえば、学校の運動場か公園に集中することになっている。これらの遊び場をえらぶ時、子どもたちは、広い、近い、友達がいる、安全、などの点を積極的な面として認めていることが表6に示されている。

表 5 遊び場所 (下段は392を100とした場合)

計	遊園地	公園	あき地	運動場の 学校	道路	山	家友自 の達分 中のや	内寺神 の社 境や	河 原	海 岸	家 の 庭	その他
1262	21	212	127	222	96	46	250	55	57	14	124	38
392	5.4	54.1	32.4	56.6	24.5	11.7	63.8	14.0	14.5	0.4	31.6	9.7

表 6 遊び場所の良いところ (下段は392を100とした場合)

計	近 い	安 全	広 い	遊ぶものが そろって いる	友だち がいる	そこし かない	じゃま されな い	その他	不 明
1087	227	190	229	97	208	50	41	33	12
392	57.9	48.5	58.4	24.7	53.1	12.8	10.5	8.4	3.1

また、遊び仲間についてみると、人数では、表7をみると、2、3人で遊ぶ場合が多い。先の「日本の子ども」⁽¹⁰⁾では、「戦時中は2、3人の集団がもっとも多かったのに対して戦後（昭和24年…筆者注）はそれが少なくなり、それよりも大きな集団が多くなっている。」と言われている。再び2、3人の小集団の遊び仲間になっていることが見られる。また、年令層でみると表8のように同年令集団（ヨコ型集団⁽¹¹⁾）であることがわかる。

表7 遊び仲間の人数

計	ひとり	2～3人	5～6人	おおぜい	無 答
392	15	188	107	73	9
100.0	3.8	48.0	27.3	18.6	2.3

表8 遊び仲間の年令 (下段は392を100とした場合)

計	ひとり	同じ学年 クラスの 人	おとな	中・高校 年上	兄弟姉妹	年 下	他	不 明
748	34	343	21	44	161	106	29	10
392	8.7	87.5	5.4	11.2	41.1	27.0	7.4	2.6

さらに、このような遊び仲間に対して満足しているかどうかをみると、人数については「もっとみんなと遊びたい」という子どもが多くなっていることが注目される。しかし、同年令集団であることに対しては、表10にみるように、満足感をもっているものや「別に何とも思わない」というものが多い。藤本氏は、タテ型集団の衰退の問題点を2つ指摘している⁽¹²⁾。1つは、子どもの世界に伝承されてきた遊び文化の衰退、もう1つは、子どもたちの安全を守る自衛組織の消滅をあげている。

表9 遊び仲間の人数に対する満足感

計	満 足	もっとみんな と遊びたい	別に何とも 思わない	そ の 他	無 答
392	162	104	110	5	11
100.0	41.3	26.5	28.1	1.3	2.8

表10 あそび仲間の年令に対する満足感

計	満足している	満足していない	別に何とも思 わない	無 答
392	227	43	116	6
100.0	57.9	11.0	29.6	1.5

以上、遊びの種類とそれらの遊びを成立させる3つの条件についてみてきたが、このような状況を、子どもたち自身が総合的にどのように意識しているのかを2つの面からみた。

表11は、家の人遊びすぎないように言う理由を、どのように受けとめているかを示している。54.6%のものが「勉強がおくれるから」と言い、27.6%のものは「交通事故にあうといけ

ないから」と言っている。これらの受けとめ方は、「家の仕事を手伝って欲しいから」というものより、ずっと多い。子どもにとって、遊びと対立するものは、「家の仕事」ではなく、「勉強」や「交通事故」であることが明らかである。

また表12によると、遊びたくても遊べない場合の理由として、あげられるものは、「場所がせまい」「遊ぶ人数が足りない」「時間がない」であり、遊びを成立させる3つの基本的条件の不足が訴えられている。

表11 親が遊びすぎないように言う理由をどう考えているか（下段は392を100とした場合）

計	交通事故 にあうと いけない	疲れて病 気になる といけな い	勉強がお くれる	おとなに なってい けな い	家の仕事 を手伝っ てほしい	なぜかわ からない	その他	無 答
566	108	36	214	56	44	48	21	39
392	27.6	9.2	54.6	14.3	11.2	12.2	5.4	9.9

表12 遊びたくても遊べない場合の理由（下段は242を100にした場合）

計	場所が せまい	遊ぶ人数 が足らな い	お金が かかる	時間が ない	危険であ る	交通事故 をおこし やすい	悪い遊 びであ る	親がう るさい	その他
598	117	105	61	100	69	22	15	52	57
242	48.3	43.5	25.2	41.3	28.5	9.1	6.2	21.5	23.6

ここで、子どもたちの遊びを成立させる条件の不足が、ひき起こされた背景をさぐってみる。「勉強がおくれる」とか「時間がない」という意識は、学校における競争、テスト体制とそれに伴う塾利用等との関連を考えさせる。

ちなみに、今回の調査対象者の塾利用度をみると、農林業地域を除いて、商業地域においては69.7%、新興住宅地域60.0%、住宅地域48.9%、工業地域38.2%という高率になっている。さらに、これら塾利用者のうちの39.6%が学習塾に通っている。また、学習塾以外の塾利用も合わせて、通塾と夕食の時間的な関係をみると「帰宅してから夕食しないで塾に行く」という場合が最も多く61.5%になっている。

表13 通塾と夕食時との関係

計	学校から直接 塾へ行く	帰宅してから夕食 をしないで塾に行 く	夕食してから 塾に行く	その他
231	35	142	39	15
100.0	15.2	61.5	16.9	6.4

農山村地域においては、学校統廃合によって通学時間をとられていると思われる。ここではバス通学児が5年生で46.7%、6年生63.0%となっている。また「交通事故に会うといけない

」とか「場所がせまい」という意識は、交通公害や過密の進行が子どもの遊びを圧迫していることを考えさせるものである。

以上のような状況の中で、今後やりたいと思う遊びは何かをみたのが表14である。

運動的なものが最も多くボール遊びが多いこと、勝敗を伴うもの、受容的なもの、が多いことは現状と同じである。ただし、スキー、スケート、プールで泳ぐなど、施設の必要な運動や、木のぼり、サイクリング、たんけんなど自然の中での運動を希望する割合が増え、勝敗を伴う遊びも現状の比重より大きくなっている。さらに抽象的ではあるが、もっと「迫力のある遊び」という表現や、「おもいっきり遊びたい」「自然の中をとび回ったり」「ころがったりしたい」という表現があった。また、「皆でゲームをやってみたい」「組の人全員で」「みんなで楽しく遊びたい」という多勢で遊んでみたいという気持ちが伝わってくる表現がみうけられた。

一方、創作的な遊びは、希望としても少ない。中に「紙ヒコーキをつくって広いところで飛

表14 希望するあそび

あそび	地域	住宅	住宅	工業	商業	農 林 業	計	%
不	明	42	12	4	19	76	153	15.3
運 動 小 計		72	98	145	106	70	491	49.2
ボール		37	57	76	48	56	274	27.5
遊具施設		19	20	46	11	7	103	10.3
スケート								
スキー								
プール								
トランポリン								
自然		4	11	1	45	5	66	6.6
サイクリング								
木のぼり								
山のぼり								
ハイキング								
ぼうけん								
たんけん								
かけっこ		12	10	22	2	2	48	4.8
勝 敗	ゲーム トランプ	51	39	57	13	31	191	19.1
創 作・構 成・表 現	あみもの あそびを つくる	2	ビー玉12 工作 6 うた	写生理科 4	紙ヒコーキ 1	あみもの ジャンプの 絵 2	27	2.7
操 作・科 学 玩 具			もけい 2	プラモデル 1	Uコン 7		10	1.0
受 容 的	テレ マ ン ガ		14	5	54	24	97	9.7
収 集								
模 倣	ご っ こ							
他		14	6	3	2	4	29	2.9
計		181	189	219	202	207	998	100.0

ばしたい」とか「理科の実験をやりたい」というのが、ごくわずかにみられた。表現的遊びとしての絵をかくという者の中に「ジャンプ」の絵をかきたい」と言う者がいて、マンガの登場者が遊び相手であろうことを考えさせ、マンガの浸透、影響を考えさせられる。

次に、希望する遊び場はどんなものか、をみたのが表15である。「スポーツのできるところ」「自然の多いところ」「広いところ」「施設設備のあるところ」などが多くなっている。

スポーツのできるところと言うのは、「キックボールやソフトボールのできるところ」という表現である。広いところというは「たくさんの人が遊べる広いところ」「いつ行っても広くて空いている所」「広くて何でもできる所」という表現がされている。施設、設備の注文というは、スケート場、プールなどに加えて「いろいろの運動コートが沢山あるところ」「夜も昼のように明るく電気がついて遊べる所」「ネットなどがあって遊ぶのにつごうのよい所」の意味である。しかし、自然の多いところというは、「魚つりを海や川でやるように」を除けば、「花のあるところ」「木のあるところ」「動物のいるところ」「風景のよいところ」という表現になっていて、具体的な遊びが予定されていないと思われるものがあった。

表15 希望するあそび場

あそび場	地 域						計
	新興住宅	住 宅	工 業	商 業	農 林 業		
な し	3	5			5	13	
広いところ	28	28	12	16	26	112	
自然の多いところ	25	36	40	46	8	155	
スポーツのできるところ	35	32	32	40	65	204	
施設設備		10	12	24	33	116	
遊 具	5	17	15				
多 人 数		3	2	3		8	
安全なところ	10	3	3	1	1	18	
自由、子どもだけ	3	9	3	1		16	
安 い	1		3			4	
近 い		1				1	
そ の 他	4	4	6	3	2	19	
計	114	148	128	134	142	666	

遊びについてのまとめ

① 遊びの種類についてみると、運動的な遊びや勝敗を伴う遊びが多いし、好まれている。この2つは、5、6学年の身体や、知的能力の発達段階からしてその段階に相応しているように考えられる。が一方、勝敗を伴う遊び、ルールのある遊びと同じように知的側面をもった創作的遊びが、ほとんどあらわれてこなかった。さらにひとり静かに遊ぶといっても、テレビ、マンガなどの受容的遊びが多いことなどをかね合わせてみると、これらの遊びの種類の傾向は、発達段階との関連ばかりではなく、他の要因との関連もあることを考えさせる。その要因の中には、子どもの遊びを成立させる条件や、子どもをとりまくマスコミヤ、商品の氾濫などがあると思われる。

② 遊びを成立させる条件としての、時間、仲間、場所の制約があることが明らかである。

とくに場所の問題では、「広いところ」や「自然のあるところ」「スケートやプールなどの施設、設備」を求めていることが注目され、環境破壊によって遊び場を奪われている状況と、それを補うものとしての施設などが求められていることを考えさせるのである。

そのほか、教育の競争、テスト体制、農山村部での学校統廃合による通学時間の延長などが「勉強がおくれる」とか「時間が足りない」などの形で遊びと対立関係になっていることが理解される。

また、遊び仲間の人数、年齢に関しては、人数が2～3人の少人数集団であること、年齢については、同年令集団であることがわかった。発達における仲間集団の役割などに関する研究の中で、とくに、異年齢集団（タテ型集団⁽¹³⁾）の衰退の問題点、利害得失などが明らかにされることが期待される。少人数集団、同年令集団であることの背景には、前述の教育体制との関連や、大きくは、子ども数、兄弟数の減少などとの関連が考えられる。また①で述べた遊びの内容の傾向と、同年令集団の性格との関連があるとすれば、藤本氏があげたタテ型集団衰退の問題点の中で、とくに「遊び文化」の喪失と、そのことによってひきおこされる大人の管理の浸透、マスコミや流行に左右される傾向という意味での指摘⁽¹⁴⁾によりいっそう注目しなければならない。

③以上のような状況の中で、手や道具を使って、モノに働きかけ現実的有用物をつくるという意味での「労働」に発展する遊びは、ほとんどみうけられない。

2. 家事手伝い

子どもたちが、家庭での仕事のうち、どのような仕事を、どの程度受け持っているかをみることによって、モノの性質を知ることのできる「労働」経験の多少を調べた。

この場合、子どもが家庭での仕事を受けてもっているていどをはかるものとして、

1. 責任をもってやっている。
2. 頼まれた時や気の向いた時やっている。
3. やったことがない。

という形に分類した。

また、「手や道具を使ってモノに働きかけ現実的有用物につくりかえる」という意味での「労働」という観点から、家庭での仕事を4つに分類した。

1. 手や道具を使ってモノに働きかけ、現実的有用物につくりかえる「労働」に発展する仕事。
2. 手を主に使用する。モノをつくりかえるという性格は含まない、という点で、前述の労働には相当しない。が、その仕事は生活する立場からモノの機能を再生し、生活とモノを結びつける性格をもっている。
3. 簡単な手の使用の仕事
4. モノの性質に直接ふれることが、他の場合より少ない性格の仕事。

そして、1にあてはまる仕事として

- { A、食事づくりの手伝い
- { B、衣服のつくろい

- 2.にあてはまる仕事として
- C、食事のあとかたづけ
 - D、庭や外まわりのはきそうじ
 - E、へやの中のはきそうじ
 - F、洗たくをする
 - G、洗たくものをたたく
- 3.にあてはまる仕事として
- H、かぎをしめる。雨戸のあけしめ。
 - I、茶わん、はしなどをならべる。
- 4.にあてはまる仕事として
- J、おつかい、かいもの

表16は、家庭でどの仕事をどの程度やっているかを示したものである。

1の仕事以外の2、3、4の仕事は、「頼まれた時や気の向いた時」にやる場合が最も多く、1の仕事は「やったことがない」場合が多くなっている。それに対して、特に4の仕事は「やったことがない」場合より「責任をもってやっている」場合が多くなっている。2の仕事は、どちらかと言えば、「やったことがない」場合の方に傾きがある。

表16 家庭での仕事の種類とその程度

	1		2					3		4
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1. 責任もって	55	23	73	45	77	28	53	98	75	87
	78		276					173		87
2. 頼まれた時	222	100	217	202	227	159	226	185	237	282
	322		1031					422		282
3. やったことがない	107	256	94	116	85	195	105	99	72	17
	363		595					171		17
4. 家にその仕事がない	6	6	5	25	1	5	4	7	6	5
	12		40					13		5
5. 不明	2	7	3	4	2	5	4	3	2	1
	9		18					5		1
計	392	392	392	392	392	392	392	392	392	392

また、「責任をもってやっている」仕事は、1よりも3、4の仕事が多く、「やったことがない」仕事は、3、4の仕事より1の仕事が多くなっている。

次に、仕事をやっている程度を地域別に比較してみると表17のようになる。まず、これらの地域を、大きく2つに分けてみた。地域の概況に従って、すなわち、住宅地域、新興住宅地域

を、家業の少ない地域とし、商業、農林業、工業地域を家業の多いところとする。

表17によれば、家業のある、なしにかかわらずどの地域でも「頼まれた時や気の向いた時」に仕事をする場合が多い。しかしながら、どちらかと言えば「頼まれた時」とは言え、家業の多い地域の方がより多く仕事に接しているようである。また、「やったことがない仕事がある」という子どもがどの地域でも30%近くいることが注目される。この場合でも、家業の多い地域の方が他方より、「やったことがない仕事がある」場合が少なくなっている。

しかしながら、「責任をもってやっている仕事」を持っているかどうかは、家業のある、なしによって大きなちがいはあるとは言えないようである。

表17 地域別、家庭での仕事の程度

	計	新興住宅	住 宅	商 業	農 林 業	工 業
計	392× (A~J) 100.0	80× (A~J) 100.0	82× (A~J) 100.0	66× (A~J) 100.0	88× (A~J) 100.0	76× (A~J) 100.0
責任もってやる	614	120 15.0	146 17.3	128 19.4	125 14.2	95 12.5
頼まれた時、気の向いた時	2057	396 49.5	399 48.7	363 55.0	476 54.1	423 55.7
やったことがない	1146	272 34.0	246 30.0	143 21.7	256 29.1	229 30.1
家にその仕事がない	70	6 0.7	26 3.1	9 1.4	18 2.0	11 1.4
不 明	33	6 0.7	3 0.4	17 2.5	5 0.6	2 0.3

かって「日本の子ども」に示されたように、家族労働に頼る家業のある家庭では、子どもは重要な労働力であったが、現在ではそうした家業のある家庭においても、子どもは働いていない場合が多くなったと思われる。

以上子どもの家事手伝いをとおして、子どもがどのような仕事を、どの程度受け持って働いているかをみてきた。

家事手伝いについてのまとめ

- (1)、仕事は「頼まれたり、気の向いたりした時」にやる場合が多く、「やったことのない仕事」の方が「責任をもってやる仕事」よりも多くなっている。
- (2)、家業のある家庭の多い地域とそうでない地域を比較しても傾向のちがいはないと思われる。
- (3)、さらに仕事の性格から言えば、手や道具を使ってモノに働きかけ、現実的有用物につくりかえる「労働」に相当する仕事は、「やったことがない」場合が多い。そして「責任をもってやる」仕事と言え、**「簡単な手の使用の仕事」や「モノの性質にふれることの少ない仕事」**になっている。

まとめ

子どもの遊びと家事手伝いをみてきたが、いずれにおいても「モノに働きかけ、つくる中でモノの性質を知る」ような遊び、仕事が少ない。その意味での「労働」経験が少ない子どもたちの輪郭がとらえられたと思われる。

残された課題

- (1)、遊びや、家庭内の仕事の教育的価値を明らかにし、遊びや仕事のどの面を通じて、子どもの人格のどの側面の発達がすすめられるのかをおさえるため、遊びや仕事の種類わけ、年齢段階との関係を厳密に検討する必要がある。
- (2)、「労働」に相当する種類の遊びや仕事の経験が少ない子どもたちは、どういう子どもたちになっているのか。生活しつづけていく上でどのような問題点があるのかなどを調査し、実情を明らかにする必要がある。
- (3)、遊びや「労働」の教育的価値についての研究成果をふまえ、家庭、地域、学校、国などが、自らの教育上の責任を果たすために、それぞれが何をしなければならないかを明らかにし、実践する必要がある。

謝辞

本調査にあたって、貴重な時間を割いて御協力くださいました、横内小学校、乗松道子先生、西豊田小学校、伊藤敬先生、駒形小学校、永島と志、長谷川千代子先生、玉川小学校、海野鉄平先生、田町小学校、橋本富次、杉山田鶴、斉藤達雄先生をはじめ各校の諸先生方に厚く御礼を申し上げ感謝の意を表します。

また、本調査に尽力くださった本学部卒業生、鈴木訓子、出沢洋子両姉に感謝いたします。

注

1. 和田典子『家庭科の教育理念』「婦人教師」1972.5 明治図書
2. 「社会科学辞典」新日本出版社 P.333
3. 諏訪義英『手の労働の教育5』「技術教育」P.50~55 1973.9 国土社
4. 坂本市郎『子どもにとって遊びとはなにか』「教育」P.6~15 1974.9 国土社
5. 「国民教育小辞典」P.200~201 国民教育研究所
6. 4.に同じ
7. 藤本浩之輔「子どもの遊び空間」P.12 NHKブックス
8. 小川太郎「日本の子ども」P.131 新評論版
9. 7.に同じ
10. 8.に同じ
11. 7.に同じ P.193
12. 7.に同じ P.196
13. 7.に同じ P.196
14. 7.に同じ P.196

その他「子どもの生活と教育」指定都市教育研究所 東洋館出版刊
「国民教育」昭和49年7月臨時増刊 労働旬報社
「技術教育研究」1974.5『労働と教育』技術教育研究会